

## ジャズダンスに専門に取り組む大学生が認識する ジャズダンスの魅力

石 川 浩 子<sup>1)</sup> 佐々木 万 丈<sup>2)</sup>

本研究の目的は、ジャズダンスの魅力の構成概念を因子分析により抽出し、その認識の特徴を調査対象者の属性別に比較し検討することであった。本研究用に作成したジャズダンスの魅力の説明する項目を用いて、大学でダンスを学ぶ学生348名を対象に調査を実施し、その中のジャズダンスを専門とする学生95名のデータに基づいて因子分析を行った。その結果、「社会性」「表現の幅広さ」および「自己発見」と解釈することができ、構成概念妥当性を満たしているといえる3因子が抽出された。

次に、学生の属性別に魅力因子に対する認識の違いを検討した。その結果、ジャズダンスの経験年数や大学における所属学年の違いでは、認識の差は認められなかった。しかし、踊りの振付の情報収集の仕方の違いや目標とするダンサーがいるかどうかの違い、またジャズダンスを専門としない学生との間の比較では、「表現の幅広さ」や「自分発見」の認識において属性間の違いが認められた。その理由としては、ジャズダンスに対する動機づけの違いなどが考えられた。

本研究により抽出されたジャズダンスの3つの魅力は、動機づけの理論に基づけば、ジャズダンスに取り組むという行動の始発において必要となる誘因価と捉えることができる。これらは、ジャズダンスの指導の在り方を考える上で、有用な視点になると期待できる。

キーワード：ジャズダンス、構成概念、誘因価、動機づけ、因子分析

### I 緒 言

ダンスの効果に対して、学術的な関心が向けられている。欧米では、介入運動としての神経科学的な効果や心身の健康増進に与える積極的な影響 (Demmer, 2004; 甲斐, 2016; Kshtriya et al., 2015; Zaggelidou and Georgescu, 2011) が報告されている。一方、国内でも、中高齢者の運動時の心肺機能への好影響や青壮年におけるストレス低減とストレス耐性の向上 (本多ほか, 1996; 高橋・山本, 2016; 渡辺, 2003)、さらには、学校体育における学習者の気分の改善や自尊心の肯定的変化、対人関係づくりの能力の向上 (中野・岡田, 2012; 金・眞崎, 2015; 檜皮ほか, 2017; 向出, 2018, 2020) などが指摘されている。これらの知見を総括すれば、ダンスへの取り組みは、心身の健康の獲得・増進や社会的能力などの獲得に貢献すると考えられ、その期待は今後ますます高まると推察される。したがって、ダンスに取り組むことの肯定的意義については、さらに多様な視点から検討される必要がある。

ここで、ダンスに取り組むことを広義の「行動」と捉え、「なぜその行動が起こるのか、その行動の起点は何か」が検討課題として焦点化される。人の行動の心理的過程を説明する動機づけの理論によれば、「欲求に基づいて具体的なもの（目標あるいは誘因となる対象）を求めること」(櫻井, 2009, p.22)を「動機」と呼び、それに従って行動を始発させ、持続し、一定の方向に導く過程は「動機づけ」(櫻井, 2009, p.21-22)と説明されている。このとき外界に存在し行動を動機づける刺激が誘因であり、その価値が主観的に高いほど、具体的な目標達成行動が生起し、その目標の達成によって満足や報酬が獲得される (櫻井, 2014)。このような動機づけの過程に基づけば、ダンスは外界に存在する誘因として人を刺激し、そこに価値を見出した人において、その価値とつながる目的や目標に則したダンスへの取り組みが生起するといえる。したがって、ダンスに取り組むことで得られる効果は、主体の、客体であるダンスに対する主観的価値 (誘因価：ファンデンボス, 2013, p.887) が高いほど、肯定的で積極的な意味を持つと考えられる。すなわち、ダンスの誘因価がポジティブな場合には、誘因への接近行動 (山田, 1999) としてダンスへの積極的な取り組みが生起し、その結果から得られる効果も主体に

1) 日本女子体育大学 (講師)

2) 日本女子体育大学 (教授)

とって意義のあるものになると説明できる。さらに、誘因価は、概念としては操作的に「魅力」に置き換えられる（藤澤，1996）。このことからすれば、主観的に捉えられたダンスの魅力の強さによって、取り組み方に違いが生じ、結果的に得られる効果も異なると考えられる。

魅力は、環境心理学では「個体間の近接関係に影響を与える資質」（ファンデンボス，2013，p.855）と定義されており、それが好意的に評価されれば個体間の相互距離が近くなる（ファンデンボス，2013，p.855）といわれている。このような、行動の生起過程と魅力の関係に基づけば、主体がダンスに対して好意の魅力を持つことができれば、その取り組みは積極性を帯び、得られる効果（行動目標の達成状況）は主体にとって有益なものになると期待できる。また、そのような効果が得られることもダンスの持つ資質であり、魅力の1つとなる。

ダンスの魅力について先行研究を概観すると、国外では、身体的強靱さやダンスにおける動きの印象が、ダンサーやダンスを踊る人の魅力にどのように影響するのかを検討した研究が複数確認できる（Hufschmidt et al., 2015；Hugill et al., 2009；Hugill et al., 2011；Weege et al., 2015）。しかし、ダンスの魅力そのものを検討した研究はみられない。また、ダンスやダンサーに関する心理学的トピックのまとめ（Hill, 2016；Sanchez et al., 2021；Schofield and Start, 2019）においても、ダンスの魅力は説明されていない。ただし、Schofield and Start（2019, pp.19-23）は、現代の西洋文化におけるダンスの果たす役割（世代継承のための男女間の性的魅力のアピールと確認、非言語的コミュニケーション、娯楽、社会的参加や関係性の構築、身体的健康など）をまとめている。これらはダンスの持つ資質であり、機能的性質あるいは効果的性質とも捉えられる。したがって、これらに対する主観的価値（誘因価）の高さは、主体が抱くダンスの魅力の強さに影響すると考えられる。

国内では、研究論文としては2件があげられる。1つは、畑野（1986）によるジャズダンスの魅力の検討であり、因子分析の結果、「自己顕示性」「身体的効果」「健康」「精神的健康」「社交性」および「ファッション性」の6因子を抽出した。2つ目は、實方（2009）による学生を対象とするボールルームダンスの魅力の検討であり、自由記述に基づく質的分析から、2人で踊ることの妙味の体験、性的な関係に基づかない異性

との関係性の中で表現を完成させる体験の面白さなどが指摘された。これら2つの研究の特徴は、総括的に捉えられるダンス一般の魅力ではなく、個別のジャンルのダンスに着目した点である。ダンスは、ジャンルによって表現形式が異なり、それぞれが独自に発展を遂げてきたことをふまえれば、魅力もまた多様であろう。したがって、ダンスの魅力については、全てのジャンルに共通する内容を整理する試みも重要であるが、ジャンル別に検討することも意義があるといえる。

ところで、ジャズダンスの魅力を検討した畑野（1986）の研究では、分析対象が経験年数の短い学生や主婦などであり、ジャズダンスによる健康の保持増進やレオタードの着用による自己アピールを楽しみたいと考えている人々であった。すなわち、その結果は、約40年前の健康ブーム（澁木，2022）を反映していたと考えられ、畑野（1986）もこの点をふまえ、抽出された魅力は、ジャズダンスそのものの魅力とは一概に言えないと述べている。したがって、あるジャンルのダンスそのものの魅力を検討するのであれば、實方（2009）のように、そのジャンルのダンスに比較的長く、熱心に取り組み、発表会やコンペティションなどにも出場し、高いパフォーマンス技術を身につけた、そのジャンルのダンス経験が豊富な人々を対象に調査分析を行う必要がある。

以上の考察に基づき、本研究では、大学でダンスを学び、さらにジャズダンスが専門の大学生を対象にデータを収集し、ジャズダンスの魅力について検討することを目的とする。具体的には、ジャズダンスの魅力を説明する項目を作成し、それを用いた調査分析から、専門的にジャズダンスに取り組む実践者が考えるジャズダンスの魅力を操作的に抽出する。さらに、その因子を説明する項目群による平均値を、ジャズダンスの経験年数や学年の違いなどの調査対象者の属性別に比較し、ジャズダンスの魅力に対する認識が属性の違いによって異なるのかどうかを検討する。

ジャズダンスは、現在は様々なメディアを通じて身近でみることができる。また、その特徴は、技術やストーリーが体系化されかつ様式化されたバレエ（村田，2006）や、それとは逆に人間の内面を自由な形式で表現するモダンダンス（遠藤，2006）とは異なり、テーマは自由でありながら動きが細分化され低い姿勢と水平移動や対抗運動とひねりなどを駆使して表現する（遠藤，2006）ことである。本研究による分析結果は、以上のようなダンスごとの特性の違いの中で、ジャズ

ダンスの魅力を探る一助になると考えられる。

なお、本研究では、ジャズダンスの魅力とは、ジャズダンス（誘因）が有する、人を惹きつけることに影響する資質（役割、機能、効果などを含む）に対して行う主観的な価値づけ（誘因価）であり、その高さがジャズダンスに対して感じる魅力の強さや大きさであると考えことにする。

## Ⅱ 方 法

### 1. 予備調査

ジャズダンスの魅力を把握する項目を作成するために記述データを収集した。調査は、自由記述方式で、関東圏在住の舞台等でジャズダンスに取り組む10名のダンサーに実施した（男性2名・女性8名：平均年齢45歳）。第1著者が直接口頭で調査を依頼し、調査用紙を配布した。教示は「あなたが考えるジャズダンスの魅力を思いっただけご記入ください」であり、ジャズダンスの魅力については「あなたを惹きつけるジャズダンスの価値的な要素」と説明した。調査用紙は、2022年4月上旬に配布し、5月上旬に全て回収した。

収集された記述は切片化され（延べ数315）、KJ法のデータ単一化とグループ編成法を援用しカテゴリー化された。一連の作業は、大学においてジャズダンスを研究・教授する第1著者、同じくスポーツ心理学を専攻する第2著者、および大学助手2名（いずれも大学もしくは大学院でジャズダンスを専門に学修した経験を有する）、合わせて4名の合議で行われた。2つ以上の同一内容の記述で1カテゴリーを構成することとした。分類の結果、「豊かな表現」「魅せる」「多様性」などの17のカテゴリーが生成された。本調査用の項目は、可能な限り自由記述の原文を用い、各カテゴリーは2項目もしくは3項目構成とした。カテゴリー化できなかった内容や、自由記述にはなかったジャズダンスの魅力と考えられる事柄を整理し、それらを加えた57項目を本調査用の項目とした。

### 2. 本調査

#### 2.1) 調査時期

調査は2022年7月上旬から下旬にかけて実施した。

#### 2.2) 調査対象者

本学ダンス学科に所属する1年から4年までの女子学生348名であった。

### 2.3) 調査内容

調査は、以下の内容について、ダンス学科の授業内で、集合調査形式で実施した。

#### 2.3) (1) 基本属性

調査対象者の年齢、学年、専門のダンスジャンル、およびその開始年齢を尋ねた。また、ジャズダンスが専門の学生（以下「専門群」と略す）には、ジャズダンスを始めたきっかけと始めたときの場所（ダンススタジオ、ダンス教室など）、振付の情報入手先、および目標とするジャズダンサーの有無について回答を求めた。

#### 2.3) (2) ジャズダンスの魅力に関する調査

予備調査で作成した57項目を実施した。各項目内容が、自分が考えるジャズダンスの魅力として、どの程度あてはまるかを尋ねた。回答は、「あてはまらない」（1点）、「あまりあてはまらない」（2点）、「どちらともいえない」（3点）、「まあまああてはまる」（4点）、「あてはまる」（5点）の5件法であった。

### 2.4) 倫理的配慮

調査は、無記名式で匿名性が保証されることやデータ管理は厳重に行い、研究終了後は完全に廃棄されることなどを文書で説明し、協力に同意した者に対して実施された。また、日本女子体育大学の倫理審査申請基準に基づき実施された。

### 2.5) 分 析

統計分析は、IBM SPSS Statistics Ver.22.0、IBM SPSS Amos Ver.22.0、およびフリーの統計ソフトRとjs-STAR XR+release 1.2.0jを用いて行われた。検定の有意水準は5%とした。

#### 2.5) (1) ジャズダンスの魅力の構成概念の検討

ジャズダンスの魅力の構成概念を検討するため、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。また、抽出された因子のデータに対する適合度を検証するため、確認的因子分析を実施した。適合度指標には、GFI（0.90以上が良好）、CFI（0.90以上が良好）、およびRMSEA（0.05以下が良好、0.05-0.1未満は許容範囲）を用いた（朝野ほか、2005）。さらに、因子を構成する項目の内的整合性を検証するため、クロンバックの $\alpha$ 係数を求めた。

なお、ある特定のダンスに取り組む者が認識するダンスの魅力には、そのジャンルの特性が反映されていると考えられる。したがって、特定のジャンルのダン

スが専門の者と専門外の者とでは、そのダンスに抱く魅力が異なると推察される。そこで、本研究におけるジャズダンスの魅力を描出する因子分析は、ジャズダンスを専門に学ぶ調査対象者のデータに基づいて行うことにした。

## 2.5) (2) ジャズダンスの魅力に関する属性比較

抽出された各因子を構成する項目群を尺度とみなし、学生の属性別に各尺度の得点を比較した。具体的には、専門群において、経験年数別 ( $t$  検定)、学年別 ( $t$  検定を利用して行う修正された有意水準に基づくボンフェローニ法による多重比較)、振付情報入手先別 ( $t$  検定)、および目標とするジャズダンサーの存在の有無別 ( $t$  検定) に分析を行った。また、専門群と他のジャンルのダンスに取り組む学生 (以下「専門外群」と略す) とで、ジャズダンスの魅力に対する認識に違いがあるのかどうかを検証した ( $t$  検定)。なお、等分散性の検定で不等分散が確認された場合には、ウェルチの方法による検定を行った。

これらの分析の目的は、ジャズダンスの指導内容や指導上の条件整備に活用できる知見を得ることである。具体的には、ジャズダンスの経験年数などの量的要因の違いと振付情報入手先や目標ダンサーの存在の有無を視点とするジャズダンスへのコミットメントの違いがジャズダンスの魅力の認識に関係するののかどうかを確かめ、また、異なるジャンルに取り組む者との間にジャズダンスの魅力の認識に違いがあるのかどうかを検討することである。

# Ⅲ 結 果

## 1. 調査対象者の属性

調査用紙は配布した348名全員から回収された。調査対象者の属性および専門群の属性は、表1の通りである。全体の平均年齢は19.82±1.32歳 (範囲: 18-24) である。ダンスのジャンル別人数では、ジャズダンスが最も多い95名 (27.3%) であった。

表1 調査対象者の属性

調査対象者全体の属性				
平均年齢	19.82±1.32			
学年別人数 (n (%))	1 年96 (27.6)	2 年76 (21.8)	3 年84 (24.1)	4 年92 (26.4)
専門ダンスジャンル別人数 (n (%・開始年齢の平均・開始年齢の範囲))				
クラシックバレエ			82 (23.6・5.10±2.94・2-19)	
モダンダンス			45 (12.9・8.62±5.89・2-20)	
コンテンポラリーダンス			37 (10.6・15.97±4.02・5-20)	
ジャズダンス			95 (27.3・12.38±4.86・3-20)	
ストリートダンス			31 (8.9・8.74±4.04・4-21)	
タップダンス			1 (0.3・開始年齢3歳)	
ボールルームダンス			6 (1.7・13.20±7.98・4-20)	
日本舞踊			3 (0.9・18.67±1.16・18-20)	
その他			43 (12.1)	
未回答			5 (1.4)	
ジャズダンス専門学生の属性				
学年別人数 (n (%))	1 年	2 年	3 年	4 年
	22 (23.2)	25 (26.3)	23 (24.2)	25 (26.3)
取り組みのきっかけ: n (%)				
	テレビを観て: 3 (3.2)		舞台で観て: 17 (18.1)	
	テーマパークのアトラクションを観て: 9 (9.6)			
	インターネット (youtube など) を観て: 4 (4.3)			
	身近な人の影響を受けて: 37 (39.4)			
	その他: 24 (25.5)			
取り組み始めの練習場所: n (%)				
	スタジオ: 55 (58.5)		スポーツクラブ: 1 (1.1)	
	ダンス教室: 16 (17.0)		学校の部活動: 12 (12.8)	
	仲間が集まって作った学校外のサークル: 3 (3.2)			
	その他: 7 (7.4)		未回答: 1 (1.1)	
振付情報の収集先: n (%)				
	テレビ: 1 (1.1)		youtube: 12 (12.8)	
	インスタグラム: 44 (46.8)		ティクトック: 1 (1.1)	
	ツイッター: 0		フェイスブック: 0	
			舞台鑑賞: 5 (5.3)	
	指導者: 30 (31.9)		友人: 0	
	映画: 1 (1.1)			
	未回答: 1 (1.1)			
目標ダンサーの有無: n (%)				
	いる: 57 (62.0)		特にいない: 38 (38.0)	

<sup>†</sup>専門ダンスジャンル別人数の「その他」は、ソングリーディング ( $n=14$ )、チアダンス ( $n=8$ )、新体操 ( $n=4$ )、バトントワリング ( $n=3$ )、競技エアロビク ( $n=1$ ) などであった。

<sup>††</sup>ジャズダンス専門学生の「取り組みのきっかけ」の「その他」は、「家族などからの誘い・薦め」「あこがれ」などであった。

<sup>†††</sup>ジャズダンス専門学生の「取り組み始めの練習場所」の「その他」は、「授業内」、「舞踊団・劇団」などであった。



次に、専門群への質問の回答では、「取り組みのきっかけ」として最も多かったのが、身近な人の影響（39.4%）であり、舞台の観覧（18.1%）、テーマパークのアトラクション観覧（9.6%）、インターネットにおけるユーチューブなどの視聴（4.3%）が続いた。また、「練習場所」は、スタジオ（58.5%）が最多で、以下、ダンス教室（17.0%）、学校の部活動（12.8%）、仲間と作った学校外のサークル（3.2%）などであった。

振付などの情報入手先は、インスタグラム（46.8%）が最も多く、指導者（31.9%）、ユーチューブ（12.8%）、舞台鑑賞（5.3%）などが続いた。

最後に、目標のダンサーは、「いる」が57名（62.0%）、「特にいない」が38名（38.0%）であった。

## 2. ジャズダンスの魅力因子

専門群のデータの歪度を求め、絶対値が1.5以上の項目は回答に強い偏りがある<sup>1)</sup>と判断し、以後の分析

から除外した。分析の結果、31項目が該当したため、これらを除く26項目（表2）により因子分析が行われた。分析では、1つの因子に対して±0.4以上の因子負荷量を持つことと、複数の因子に対して±0.4以上の因子負荷量を示さないことを条件に項目を選抜し、因子分析を繰り返した。その結果、5回目の分析で、13項目から成る3因子が抽出された（表3）。

次に、3因子のデータに対する適合度を検証するため、確認的因子分析を行った。分析の結果、GFIが.902、CFIが.919、RMSEAが.086であった。RMSEAの値がやや高いが許容範囲に含まれることから、データへのあてはまりは良いと判断した。

また、各因子を構成する項目の内的整合性を確かめるためクロンバックの $\alpha$ 係数を求めた。その結果、第1因子は.85、第2因子は.82、第3因子は.79であり、いずれも、高い値を示し、項目の内的整合性は満足できると判断した。

表2 因子分析に用いられた26項目の記述統計（ $n=95$ ）

項目番号	平均	標準偏差	歪度
8. 若々しい体型を維持できる	3.99	0.49	-1.001
9. 忍耐力が身につく	4.11	0.95	-0.897
10. 考え方が前向きになる	3.77	1.04	-0.398
11. いろいろなコミュニティと関わることで知人が増える	4.36	0.84	-1.206
12. 人を気づかう心を養える	3.81	1.02	-0.701
15. 何事にも真面目にとりくむようになる	3.99	0.94	-0.372
16. 周りの人とのコミュニケーション能力を高めることができる	4.07	1.00	-0.862
17. 踊りの形式（スタイル）が時代によって変化し続ける	4.48	0.76	-1.379
23. また踊りたいという気持ちになれる	4.72	0.50	-1.488
28. 自己肯定感が高まり、自信がつく	4.17	1.00	-1.270
29. 考え方が若々しくなる	3.65	1.06	-0.302
30. 踊ることで他者と触れ合う場が増える	4.36	0.78	-1.136
31. 生活の質を高める行動ができるようになる	3.76	1.07	-0.619
34. 何事にも挑戦できるようになる	4.06	0.98	-0.829
38. 年齢に関係なく踊り続けられる	4.44	0.82	-1.222
39. 細かい心の動きを表現できる	4.47	0.84	-1.422
41. オリジナリティのある作品創りができる	4.57	0.65	-1.466
42. 踊ることに無心になれる	4.14	1.07	-0.975
45. 気づいていなかった自分を演じられる	4.42	0.82	-1.280
46. ケガをしにくい体をつくることができる	3.92	1.05	-0.677
47. 柔軟な発想力が身につく	4.32	0.89	-1.318
48. 自分を客観視できるようになる	4.18	0.98	-0.927
49. 踊ることで観ている人との間に関係づくりができる	4.17	0.91	-0.867
51. 音楽を理解し分析する能力が養える	4.64	0.52	-1.049
53. 行動力が身につく	4.06	0.94	-0.594
54. 仲間を気づかう心や思いやる心を養える	4.19	0.87	-1.082

<sup>1)</sup> 分析から除外された31項目の内、歪度が2以上であった16項目を以下に示す（数値は、平均、標準偏差、歪度）。年齢や性別に関係なく踊れる（ $4.45 \pm 0.95$ 、-2.00）、アイデア次第でいろいろな自分になれる（ $4.72 \pm 0.63$ 、-2.56）、歌詞の内容に動きを当てはめて踊ることができる（ $4.73 \pm 0.68$ 、-2.78）、いろいろな自分を踊りで表現できる（ $4.67 \pm 0.68$ 、-2.25）、リズム感を養うことができる（ $4.58 \pm 0.72$ 、-2.27）、踊っていて気持ちがいい（ $4.95 \pm 0.22$ 、-4.07）、いろいろな感情を表現できる（ $4.82 \pm 0.41$ 、-2.16）、年齢や性別に関係なく観ている人に感動を与えられる（ $4.85 \pm 0.44$ 、-3.88）、型や枠にとらわれず自由に踊れる（ $4.62 \pm 0.73$ 、-2.10）、その時代の音楽と融合しながら進化し続ける（ $4.77 \pm 0.50$ 、-2.05）、普段の自分にはない自分を演じられる（ $4.67 \pm 0.61$ 、-2.00）、持久性や柔軟性、筋力などの体力を向上させられる（ $4.71 \pm 0.56$ 、-2.15）、しなやかな動きや大胆な動きなど幅広い表現力が養える（ $4.82 \pm 0.41$ 、-2.16）、テレビ、コマーシャル、映画、舞台、テーマパークなど、様々な場面で目につくことができる（ $4.76 \pm 0.52$ 、-2.56）、キレのある動き、しなやかな動き、ダイナミックな動き、華やかな動きなど多彩な動きで人を魅了させられる（ $4.88 \pm 0.35$ 、-3.15）、繰り返し練習し、時間をかけることが上達につながる（ $4.72 \pm 0.60$ 、-2.29）。

表3 ジャズダンスの魅力に関する因子分析結果

		因子負荷量		
項目		因子 1	因子 2	因子 3
16.	周りの人とのコミュニケーション能力を高めることができる	1.01	−0.09	−0.14
54.	仲間を気づかう心や思いやる心を養える	0.81	−0.05	0.02
30.	踊ることで他者と触れ合う場が増える	0.59	0.28	−0.05
31.	生活の質を高める行動ができるようになる	0.59	0.08	0.14
12.	人を気づかう心を養える	0.58	0.14	0.09
39.	細かい心の動きを表現できる	−0.05	0.93	−0.10
38.	年齢に関係なく踊り続けられる	−0.04	0.69	0.06
47.	柔軟な発想力が身につく	0.06	0.59	0.23
41.	オリジナリティのある作品創りができる	0.18	0.57	−0.10
8.	若々しい体型を維持できる	−0.02	−0.20	0.99
45.	気づいていなかった自分を演じられる	−0.19	0.19	0.68
9.	忍耐力が身につく	0.23	−0.09	0.63
28.	自己肯定感が高まり、自信がつく	0.04	0.17	0.48
初期固有値		6.89	1.61	1.27
因子間相関 因子 1		1.00	0.66	0.57
因子 2		0.66	1.00	0.47
因子 3		0.57	0.47	1.00

†項目の数字は、調査用紙における記載番号。

††第1因子の項目16の因子負荷量が1.0を超えているが、斜交回転の場合は1.0もしくは-1.0を超える場合がある（松尾・中村、2002）。

第1因子は、コミュニケーション能力や人への気づかい・思いやりの心の高まりとそれに基づく行動を通じて生活が豊かになることを説明する5項目から構成されている。そこで、「社会性」と解釈・命名した。第2因子は、年齢に左右されない自由さと独創的な発想が可能で、心の細部まで踊りで表現できることを説明する4項目といえる。そこで、「表現の幅広さ」と解釈・命名した。第3因子は、体型の維持、忍耐力の獲得、そして自己肯定感や自信の向上などに基づき、新たな自分が表現できることを説明する4項目の内容と解釈できる。そこで、「自己発見」と命名した。

以上により、以後の分析では、各因子を構成する項目群を尺度とみなし、項目得点の合計を項目数で除した値を各尺度の得点として用いる。得点が高いほど、それぞれの魅力を強く認識していると捉えられる。

### 3. ジャズダンスの魅力に対する認識の属性別比較

#### 3.1) 経験年数別

専門群の、現在の年齢から開始年齢を引いて求めた経験年数の平均は、 $7.43 \pm 5.00$ 歳（中央値6.00）であった。そこで、7年以上の経験者を経験高群（44名・47.3%）、7年未満を経験低群（49名：52.7%）として、

各尺度の平均を比較した（ $t$ 検定）。分析の結果、「社会性」は $t(91) = 0.50$ ,  $p = .617$ ,  $d = 0.10$ , 検定力=0.08（各群の平均および標準偏差：経験高群 $4.10 \pm 0.74$ , 経験低群 $4.02 \pm 0.78$ ；以下同順に表記する）, 「表現の幅広さ」は $t(91) = 0.48$ ,  $p = .632$ ,  $d = 0.10$ , 検定力=0.08（ $4.49 \pm 0.60$ ,  $4.42 \pm 0.70$ ）, および「自己発見」は $t(91) = 0.69$ ,  $p = .492$ ,  $d = 0.14$ , 検定力=0.10（ $4.24 \pm 0.66$ ,  $4.14 \pm 0.75$ ）であった。いずれにも経験年数の違いによる有意な得点差はみられなかった。

#### 3.2) 学年別

学年別専門群の各尺度の平均について、有意水準を調整して行うボンフェローニの方法<sup>2)</sup>による多重比較を用い、1年と2年、1年と3年、1年と4年、2年と3年、2年と4年、3年と4年の6つの組み合わせにより比較した。分析の結果（表4）, 「社会性」（各学年の平均および標準偏差：1年（ $n=22$ ）： $3.93 \pm 0.90$ , 2年（ $n=25$ ）： $3.99 \pm 0.73$ , 3年（ $n=23$ ）： $3.93 \pm 0.83$ , 4年（ $n=25$ ）： $4.28 \pm 0.65$ ；以下同順に表記する）, 「表現の幅広さ」（ $4.63 \pm 0.50$ ,  $4.51 \pm 0.57$ ,  $4.08 \pm 0.84$ ,  $4.58 \pm 0.51$ ）, および「自己発見」（ $4.27 \pm 0.70$ ,  $3.95 \pm 0.77$ ,  $4.05 \pm 0.83$ ,  $4.41 \pm 0.53$ ）のいずれにおいても、各有意確率は調整された有意水準（ $\alpha = 0.0083$ ）

表4 ボンフェローニ法の多重比較による統計量 ( $p$  値)

下位尺度	組み合わせごとの $p$ 値					
	I	II	III	IV	V	VI
社会性	0.787	0.990	0.127	0.787	0.148	0.111
表現の幅広さ	0.466	0.011	0.763	0.044	0.649	0.018
自己発見	0.142	0.346	0.448	0.654	0.018	0.081

\* $p < .0083$ †有意水準  $\alpha = 0.0083$  は、有意水準  $\alpha = 0.05$  を、比較する学年の組み合わせ数 (6) で除した値である。

††組み合わせの記号: I = 1年と2年, II = 1年と3年, III = 1年と4年, IV = 2年と3年, V = 2年と4年, VI = 3年と4年

未満を示す結果はみられなかった。

### 3.3) 振付情報入手先別

振付の情報入手先は、テレビ、ユーチューブ、インスタグラム、ティックトック、ツイッター、およびフェイスブックをメディア群 (58名・61.7%)、舞台鑑賞、指導者、および映画を直接的観覧群 (36名・38.3%) とし、2群にまとめた (不明1名)。

両群で各尺度得点の平均を比較した結果 ( $t$  検定)、「社会性」が、 $t(92) = 0.92$ ,  $p = .358$ ,  $d = 0.20$ , 検定力 = 0.15 (各群の平均および標準偏差: メディア群  $3.98 \pm .79$ , 直接的観覧群  $4.13 \pm .78$ ; 以下同順に表記する), 「表現の幅広さ」が、 $t(90.731) = 2.37$ ,  $p = .020$ ,  $d = 0.50$ , 検定力 = 0.65 ( $4.33 \pm .71$ ,  $4.63 \pm .49$ ), および「自己発見」が、 $t(91.878) = 3.12$ ,  $p = .003$ ,  $d = 0.66$ , 検定力 = 0.87 ( $4.01 \pm .80$ ,  $4.43 \pm .51$ ) であった。「表現の幅広さ」と「自己発見」において両群の平均差が有意であり、いずれも直接的観覧群の方がメディア群よりも得点が高かった。ただし、「自己発見」の検定力は十分に高いが、「表現の幅広さ」の検定力は十分に高いとはいえなかった。

なお、「表現の幅広さ」と「自己発見」は、不等分散がみられたため、ウェルチの方法に基づいて行われた修正  $t$  検定の結果である。

### 3.4) 目標とするジャズダンサーの有無別

目標のジャズダンサーが存在する群 (57名) と特には存在しない群 (38名) とで、各尺度得点の平均を比較した ( $t$  検定)。分析の結果、「社会性」が、 $t(90) = 1.53$ ,  $p = .129$ ,  $d = 0.33$ , 検定力 = 0.33 (各群の平均および標準偏差: 存在群  $4.16 \pm .75$ , 不在群  $3.92 \pm .73$ ; 以下同順に表記する), 「表現の幅広さ」が、 $t(90) = 2.37$ ,  $p = .020$ ,  $d = 0.51$ , 検定力 = 0.65 ( $4.61 \pm .53$ ,  $4.31 \pm .63$ ), および「自己発見」が、 $t(90) = 1.71$ ,  $p = .091$ ,  $d = 0.37$ ,

検定力 = 0.39 ( $4.27 \pm .73$ ,  $4.01 \pm .71$ ) であった。以上により、「表現の幅広さ」において両群の平均差が有意であり、目標のジャズダンサーが存在する学生の方が存在しない学生よりも、「表現の幅広さ」の得点が有意に高いことが示された。ただし、検定力が十分に高いとはいえなかった。

### 3.5) 専門別

専門群と専門外群との間で各尺度の得点を比較した ( $t$  検定)。分析の結果、「社会性」が  $t(338) = 1.96$ ,  $p = .051$ ,  $d = 0.24$ , 検定力 = 0.50 (各群 ( $n$ ) の平均および標準偏差: 専門群 (95)  $4.03 \pm 0.75$ , 専門外群 (245)  $3.87 \pm 0.70$ ; 以下同順に表記する), 「表現の幅広さ」が  $t(340) = 2.83$ ,  $p = .005$ ,  $d = 0.34$ , 検定力 = 0.80 ( $4.45 \pm .64$ ,  $4.24 \pm .61$ ), および「自己発見」が  $t(341) = 1.52$ ,  $p = .130$ ,  $d = 0.18$ , 検定力 = 0.33 ( $4.17 \pm .73$ ,  $4.05 \pm .63$ ) であり、「表現の幅広さ」において両群の平均差が有意であった。すなわち、専門群の方が専門外群よりも、「表現の幅広さ」の得点が高いと判定された。検定力は十分であった。

## IV 考 察

### 1. 標本集団の特徴

調査対象者には、各々が専門とするジャンルがあり、コンテンポラリーダンス、競技ダンス、および日本舞踊以外のジャンルの開始年齢の平均は、小学校期あるいはそれ以前であった。したがって、調査対象者の多くは、特定のジャンルのダンスに長期間取り組んできたといえる。特に、ジャズダンスが専門の学生が最も多く (約25%)、開始年齢 (平均12歳) を考慮すれば、その多くはステージ上や衆目の前での発表会などの経験も多いと推察される。

また、取り組みのきっかけは、身近な人の影響が最

も多く (39.4%)、続いて実際の舞台鑑賞 (18.1%) であった。テーマパークのアトラクション鑑賞 (9.6%) も加えると、直にジャズダンスの情報やパフォーマンスに触れたことが、ジャズダンスとの結びつきを強めたと考えられる。さらに、取り組み始めの練習場所は、スタジオとダンス教室を合わせると75%であった。したがって、ジャズダンスが専門の学生の多くは、当初から指導者の元で直接、専門的指導を受けていたといえる。

以上により、本研究の調査対象者は、本学ダンス学科の学生のみであるが、各々が専門とする様々なジャンルのダンスに、専門的にまた長期にわたり取り組む大学生集団であり、ジャズダンスが専門の学生も同様といえる。したがって、得られるデータやその分析結果は、本研究の目的に適うものであると判断した。

## 2. ジャズダンスの魅力の構成概念

作成された57項目の歪度の符号はすべてマイナスであった。このことは、回答が「あてはまる」の側に偏っていたことを表している。したがって、作成された項目は、ジャズダンスの魅力の説明として、専門に取り組む学生から当為の内容と捉えられていたことが示唆される。作成された項目は内容的に妥当であったといえるであろう。

また、そのような項目の中から抽出された3因子を構成する13項目は、確認的因子分析の結果に基づけば、データに対するあてはまりが良かった。また、内的整合性の高さは一般的基準 ( $\alpha = .80$  : カーマイン・ツェラー, 1983) とほぼ同等かそれを超えていた。したがって、「社会性」「表現の幅広さ」および「自己発見」は、ジャズダンスの魅力として構成概念妥当性を有しているといえる。

ところで、3因子の内容を、畑野 (1986) の一般市民を対象とする結果と比べた場合、「社会性」は畑野 (1986) の「社交性」と共通しているといえる。ジャズダンスを練習し踊ることが、対人関係の構築と維持に繋がるという点は、ジャズダンスに取り組む誰もが感得できる魅力といえるようである。一方、「表現の幅広さ」と「自己発見」は、畑野 (1986) の分析結果にはみられない。これらは、専門的にジャズダンスに取り組むことで理解できる魅力と捉えられる。

また、各因子の構成項目の内容には、「能力を高めることができる (項目16)」「心を養える (項目12および54)」「発想力が身につく (項目47)」「体型を維持で

きる (項目8)」「忍耐力が身につく (項目9)」「自信がつく (項目28)」などがあり、ジャズダンスから得られる「効果」が含まれる。また、ジャズダンスがこれらの効果を生じさせるのであれば、それらはジャズダンスの「機能」を説明しているといえる。この点については、すでに魅力の説明で指摘の通り、ジャズダンスという誘因が持つ人を惹きつける資質 (ファンデンボス, 2013, p.855) といえるであろう。したがって、これらの効果や機能に対して主体が抱く主観的価値の高さが、ジャズダンスに対して抱く魅力の強さを意味することとなり、ジャズダンスに対する取り組みの態度 (コミットメント) の違いに反映すると考えられる。

## 3. ジャズダンスの魅力に対する認識の特徴

ダンス経験に関わる量的側面として、経験年数と所属学年の違いに着目し、ジャズダンスの魅力の認識を比較した。その結果、どちらにも統計的に有意な違いはみられなかった。これにより、ジャズダンスの魅力の認識は、専門的な取り組みが当初から実施されれば、早い段階で理解できるようになると推察される。ただし、本研究は横断的検討であり、経験や学びの経時的変化が考慮されていない。ジャズダンスに取り組むことによる魅力の認識の深化を明らかにするためには、縦断的なデータに基づく分析が必要である。また、時系列を考慮すれば、パフォーマンススキルレベルの変化に伴い指導方法が変わったり、指導者や仲間との人間関係が変化したりするであろう。したがって、ジャズダンスの魅力がどのように深まるのかは、表現能力やジャズダンスへの取り組みに関わる社会的環境の変化との関連もふまえ検討される必要がある。

一方、振付のアイディアの入手先の違いや目標とするジャズダンサーの存在の有無を視点とする比較では、魅力に対する認識の一部に違いがみられた。すなわち、情報入手先別の比較では、直接見聞しそれを参考に振付を考える学生群において、「表現の幅広さ」と「自己発見」の認識が有意に高かった。また、目標とするダンサーがいる学生群の「表現の幅広さ」の認識が有意に高かった。これらの結果の背景には、本人のジャズダンスへの取り組みに対する動機づけや達成目標の違いなどが関係していると推察される。

情報源となるメディアに、インターネット等で繋がり情報を得る方法は効率的である。一方、ダンサーのパフォーマンスを劇場や舞台で直接鑑賞する場合は、時間をつくり、費用をかけ、離れた場所まで移動する



意志と行動が必要となる。したがって、メディアから情報を得る場合とは異なる心理的要因が働いていると考えられる。さらに、舞台を直に鑑賞することには、その場にしかないダンサーと観衆の一体感や高揚感などの体験が含まれる(北崎, 2018)。すなわち、劇場や舞台で直に目にする振付は、単なる動きの情報として記憶されるのではなく、ダンサーと観衆が創り出すその場の雰囲気に自らの感情が連結した情緒豊かな情報として記憶されるであろう。そのようなダンスの臨場の体験が、ジャズダンスの魅力をより強く認識させる心理的基盤となることは十分に予想できる。

また、目標とするダンサーの存在は、言わば、憧れを持ち尊敬できるモデルの存在を意味しており、このようなモデルの存在は活動に対する自律的な動機づけを促す可能性がある(上地, 2011)。したがって、目標とするダンサーが存在する学生は、ジャズダンスにより強く主体的に取り組もうとしていると推測される。そのような自律的な動機づけが、ジャズダンスの魅力としての「表現の幅広さ」に気づかせ、理解を深めさせると考えられる。ただし、「表現の幅広さ」は検定力が高くなかった。したがって、この点についてはサンプルサイズを増やす<sup>(3)</sup>などし、再度、結果の信頼性を検証する必要がある。

また、ジャズダンスが専門の学生と他ジャンルの学生との比較では、「表現の幅広さ」の認識が、専門に取り組む学生において有意に高いことが示された。したがって、自分自身が想い描くテーマに対して、年齢などにとらわれず自由に発想し、一方で細やかな心情を表す振付を作品として踊ること、そしてその妙味を味わえることがジャズダンスの魅力になっているといえるようである。

## V まとめと今後の課題

本研究の目的は、ジャズダンスの魅力を明らかにし、その認識の特徴を調査対象者の属性別に比較し検討することであった。ジャズダンスが専門のダンサーと指導者に対して自由記述調査を実施し、ジャズダンスの魅力に関する記述データを収集した。次に、そのデータに基づく項目を使用し、大学においてジャズダンスを専門に学ぶ学生95名のデータを用い因子分析を行った。その結果、「社会性」「表現の幅広さ」および「自己発見」と解釈できる3因子が抽出され、構成概念妥当性が認められた。

次に、調査対象者の属性別にジャズダンスの魅力に対する認識の違いを検討した結果、経験年数や所属学年の違いによる差は認められなかった。一方、振付の情報入手先の違いや目標とするダンサーの有無、また他ジャンルを専門とする学生との比較では、「表現の幅広さ」や「自己発見」の認識において違いがみられた。その理由としては、ジャズダンスへの取り組みの動機づけの違いなどが考えられた。

本研究により抽出されたジャズダンスの魅力は、ジャズダンスに取り組むという行動の誘因値であり、3つの内容を持つことが示されたといえる。これらの魅力は、特に、ジャズダンスの指導場面において、指導内容と指導の在り方を設計する上で有用な視点になると期待できる。

ところで、国内では、ダンサーの心理的要因の特性や特徴を検討した知見が、欧米と比べて少ない。この点において、本研究はジャズダンスの魅力について検討したに過ぎない。ダンスの魅力はジャンルにより異なると考えられ、その固有の魅力は、それらに専門に取り組むダンサーを惹きつける誘因になっていると予想される。近年注目されているヒップホップやK-popなども、特徴的な魅力を持つと考えられる。ダンスが人々をどのように魅了するのかを実証的に明らかにすることは、それぞれのジャンルのダンスの特性を多角的にとらえる上で重要といえるだろう。

最後に、今後の課題としては、より正確にジャズダンスの魅力を把握するために、ジャズダンスを学究する多くの学生やプロのダンサーも含めた調査分析を実施することである。また、バレエやモダンダンスなど異なるジャンルのダンスに対する魅力との違いなどを比較することである。これらを検討・考察することは、ダンスに取り組むことの多用な意義を明らかにする上で重要と考えられる。

### 注

- (1) 歪度は、経験的に、絶対値が1以上の場合は注意を要するが分析可能であり、絶対値が2以上の場合は危険と考えるのが適当(田中, 2021)である。本研究では1と2の中間をとり、1.5を分析の不可の判断基準とした。
- (2) 有意水準 $\alpha=0.05$ を、繰返し行う $t$ 検定の回数(6回)で除して求めた $\alpha=0.0083$ を調整された有意水準として用いた。
- (3) Rによれば、振付情報入手先別の $t$ 検定では、有意水準 $\alpha=0.05$ 、効果量 $d=0.50$ とし、検定力 $=0.80$ を得るためには、サンプルサイズは $N=127$ が必要である。また、

目標とするダンサーの有無別の  $t$  検定では、有意水準  $\alpha = 0.05$ 、効果量  $d = 0.49$  とし、検出力  $= 0.80$  を得るには、 $N = 133$  のサンプルサイズが必要である。

## 文献

- 朝野熙彦 (2005) 適合度指標の読み方がわからないのですか? : 入門 共分散構造分析の実際 (朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢), pp.120-122, 講談社サイエンティフィック, 東京.
- カーマイン, ツェラー: 水野欽司・野島栄一郎訳 (1983) テストの信頼性と妥当性, p.49, 朝倉書店, 東京. <Carmines, E.G. and Zeller, R.A. (1979) Reliability and Validity Assessment, SAGE Publications, Tokyo>
- Demmer, C. (2004) A survey of complementary therapy service provided by hospices, Journal of Palliative Medicine 7 : 510-516.
- 遠藤保子 (2006) 舞踊: 最新スポーツ科学事典 (日本体育学会監修), pp.758-761, 平凡社, 東京.
- 藤澤等 (1996) 一般生命システム論: 生命システムの基本, 関西大学社会学部紀要 27(3) : 125-154.
- 畑野裕子 (1986) ダンスの魅力に関する因子分析的研究—大阪府下のジャズダンス教室所属者を対象として—, 舞踊学 9 : 13-14.
- Hill, A.P. (2016) The psychology of perfectionism in sport, dance, and exercise, pp.1-pp.329, Routledge, London.
- 楢皮貴子・小島瑞貴・梅ちか子・若井由梨・堀場みのり (2017) 大学生を対象としたダンス授業の導入に用いる二人組のリズム系ダンスに関する研究: 一時的気分尺度と授業レポートより, 新潟大学教育学部研究 10 : 233-244.
- 本多弘子・鈴木省三・仲野隆士・石三香織 (1996) 生涯スポーツとしてのボールルームダンスの生理的効果について, 仙台大学紀要 27 : 33-41.
- Hufschmidt, C., Weege, B., Röder, S., Pisanski, K., Neave, N., and Fink, B. (2015) Physical strength and gender identification from dance movements, Personality and Individual Differences 76 : 13-17.
- Hugill, N., Fink, B., and Neave, N. (2009) Men's physical strength is associated with women's perceptions of their dancing ability, Personality and Individual Differences 47 : 527-530.
- Hugill, N., Fink, B., Neave, N., Besson, A., and Bunse, L. (2011) Women's perception of men's sensation seeking propensity from their dance movement, Personality and Individual Differences 51 : 483-487.
- 實方宏海 (2009) ボールルームダンスの“本質的特性”に関する研究: ボールルームダンスの“魅力”を指標とした自由記述の調査, 舞踊学 32 : 45-54.
- 甲斐久実代 (2016) ダンスのバランス・認知機能向上に関する文献的検討, 名古屋女子大学紀要 62 : 51-58.
- 金愛慶・眞崎雅子 (2015) ダンスが身体的自己概念と自尊感情の変化に及ぼす影響, スポーツ健康科学研究 37 : 21-28.
- 北崎充晃 (2018) 人と人以外のものの「間」にある叡智—佐藤論文へのコメント—, 心理学評論 61 : 379-383.
- Kshtriya, S., Barnstaple, R., Rabinovich, D. B., and DeSouza, J.F.X. (2015) Dance and aging: A critical review of findings in neuroscience, American Journal of Dance Therapy 37 : 81-112.
- 松尾太加志・中村知靖 (2002) 因子負荷はどのような範囲の値をとるのですか? : 誰も教えてくれなかった因子分析 (松尾太加志・中村知靖), p.162, 北大路書房, 京都府.
- 向出章子 (2018) ダンス授業による大学生のコミュニケーション力の変化の検討, 武庫川 女子大学学校教育センター年報 3 : 77-85.
- 向出章子 (2020) ダンスの授業における大学生の心理的変容の検討—対人関係に着目して—, 教育学研究論集 15 : 62-69.
- 村田芳子 (2006) バレエ: 最新スポーツ科学事典 (日本体育学会監修), p.762, 平凡社, 東京.
- 中野優子・岡田猛 (2012) 即興表現を中心としたダンス授業実践とその効果—大学生の心理的変容に注目して—, 舞踊学 35 : 53-64.
- 櫻井茂男 (2009) 自ら学ぶ意欲の心理学, 有斐閣, 東京.
- 櫻井茂男 (2014) 人はなぜ行動を起こすのか, 児童心理 68 (15) : 1-3.
- Sanchez, E., Collins, D., and Macnamara, A. (2021) Performance psychology for dancers, pp.1-p.143, The crowood press, Ramsbury.
- Schofield, C. and Start, L. (2019) Psychology for dancers, pp.1-pp.196, Routledge, New York.
- 澁木祥子 (2022) 日本におけるジャズダンスの受容史—戦前レビューとして/戦後シアターアートとして—, 日本女子体育大学研究紀要 52 : 11-23.
- 高橋和子・山本光 (2016) レジリエンスを高めるダンスの有効性に関する研究—大学生および教員を対象として—, 日本女子体育連盟学術研究 32 : 1-16.
- 田中敏 (2021) R を使った<全自動>統計データ分析ガイド, p.101, 北大路書房, 京都.
- 上地広昭 (2011) 運動・スポーツ場面における同一視と動機づけの関係, 体育学研究 56 : 215-228.
- ファンデンボス: 繁枘算男・四本裕子監訳 (2013) APA 心理学大辞典, p.855, 培風館, 東京 <VandenBos, G.R. (2007) APA Dictionary of Psychology, the American Psychological Association (APA).>
- 渡辺明日香 (2003) 総説 ダンス/ムーブメント・セラピーによるストレスケア効果の可能性, 北海道大学大学院教育学研究科紀要 88 : 207-220.
- Weege, B., Michael, N., Pham, M., Shackelford, T.K., and Fink, B. (2015) Physical strength and dance attractiveness: further evidence for an association in men, but not in Women, American journal of human biology 27 : 728-730.
- 山田恒夫 (1999) 動因/誘因: 心理学辞典 (中島義明ほか

編), p.620-621, 有斐閣, 東京.

Zaggelidou, A.M.E. and Georgescu, L. (2011) The effect of dance practice on health, A Review Asian Journal of Exercise and Sport Science 8 : 100-112.

(令和5年9月11日受付)  
(令和5年12月7日受理)

# Attractiveness of Jazz dance recognized by college students specializing Jazz dance

*ISHIKAWA Hiroko and SASAKI Banjou*

*Bulletin of Japan Women's College of Physical Education, 2024, 54, 1-12*

The purpose of this study was to extract constructive concepts of the attractiveness of jazz dance by factor analysis and to compare and investigate how the survey participants recognized it in relation to their attributes. We surveyed 348 students who learned dance at university, using explanation items of the attractiveness of jazz dance prepared for this study. Factor analysis of the data of 95 students who majored in jazz dance extracted and interpreted three factors as pertinent to the attractiveness of jazz dance—sociality, breadth of expression, and self-discovery—which were considered to have validity for the constructive concept.

We examined gaps in perception of the attractiveness factors in relation to the students' attributes. We found no significant gap related to years of experience in jazz dance or academic year at university, but we found a gap in breadth of expression and self-discovery related to methods of collecting information on choreography or whether students had a dancer as a model or not ; and in comparison with students who did not major in jazz dance. The reason could be a difference in motivation for jazz dance.

Based on the theory of motivation, the three factors extracted can be interpreted as valence that is necessary at the beginning of the behavior of engaging in jazz dance. We expect that the three factors offer a useful perspective for considering teaching contents and means in instructing jazz dance.

**Keywords** : Jazz dance, constructive concepts, valence, motivation, factor analysis